

知るともっと楽しい

八百津だんじり祭

毎年4月第2日曜日(本樂)・その前日の土曜日(試樂)

はじまり その昔は、稲の成長を見て五穀豊穡を願う秋祭りであったそうです。延宝3(1675)年から現在のように神馬一頭、獅子頭一頭、だんじり三輦を出し祭式を行なったといわれています。



にしこりつなば 錦織綱場 八百津町を流れる木曾川には、上流の山で伐採した杉や檜などの木を建築資材等として尾張地方へ運ぶため集積し筏に組んだ「綱場」という場所が多くあり、なかでも「錦織綱場」は尾張藩の役所が置かれる要所でした。



また、材木以外にもさまざまな物資が運搬された拠点の黒瀬湊は街道とも連携し、八百津は山国と尾張との交易のハブとして栄えました。

明治頃の錦織役場

秋から春へ もとは豊年祭で10月開催であったお祭りですが、それは木材運搬の繁忙期であり、収益損失に繋がることが大きくなる筏乗り業者たちから時期変更の意見書が出され9月開催になり、さらに議論を経て明治32(1899)年からは春のお祭りになりました。人々と自然、舟運で栄えた歴史を物語る八百津ならではのエピソードです。



錦織綱場の様子。右側の材木が筏に組まれて左に集められている。



ほんがく 本樂の日の朝に役場前で並ぶ3輦のだんじり。各部を間近に観察できる機会でもあります。

だんじり 町衆が綱を曳く三輦のだんじりは揃うと巨大な一艘の船になります。鉄輪で補強された四つの車輪の上にお囃子が乗る舞台が乗り、彫刻や刺繍、幟などで飾られ、船底部分は波の意匠が染め抜かれた布で覆われます。さまざまな材でできた骨組みは、釘を使わず地元で採れる藤のつるによって、伝承された筏づくり技術を使って **藤つる** 締め上げられています。



ばやし 打ち囃子 笛・太鼓・鼓からなり、だんじりを町中で曳きまわす場面に合わせて複数の異なる曲が奏でられます。それらとは別に「神樂舞」が演奏される時には、だんじりは静止しています。



阿弥陀坂 あみださか

お囃子とともに町衆の綱に引かれ町を練り歩いた三輦のだんじりは、その両側にひとり一人ぶんが立てる幅ほどで古くから変わらない石畳の坂道「阿弥陀坂」を勇ましく続けて駆け上がって大松神社の境内に揃い踏みします。

あみださか 阿弥陀坂を駆け上がる山車(昭和10年ごろ)。坂の途中で止まるのは縁起が悪いとされ一気に登るさまは迫力満点。

十六人衆と世話役

だんじりが巨体を揺らし狭い道や辻を建物などに接触することなく速度を保ち勇壮に曲がってゆくさまは、祭りの見どころです。十六人衆と呼ばれる屈強な車方たちが、経験豊富な車方世話役・後見の指示に従って、転回操作をしています。車方には



くるまかた 車方 四人づつ四つの役割があり、「前押し」「後押し」が山車の前後に伸びた梶棒を押し、「前手子(梶子)」「後輪手子」が車輪に手子を差し込み、動くタイミングをあわせ舵取りをしています。

組 町内には四つの組があり、三輦のだんじりの船首部を あしど 芦渡組、中央部を本郷組、船尾部を黒瀬組が曳き、それらを すか 須賀組の神馬や獅子頭が先導しています。

